

## 高校生・大学生のための国際キャリアアップシリーズ

### Chapter15 ジャーナリストとしてのグローバル人材

本Chapterでは、『グローバルキャリアのすすめ～プロフェッショナル講義～』から、ジャーナリスト出身の小池先生のキャリアを紹介しましょう。

#### はじめに

##### 日本にとってグローバル人材は絶対に必要

ここでは筆者のパーソナル・ヒストリーを語りながら、グローバル人材に必要な要件や知識とは何かを考えて行きたいと思います。章のタイトルは「メディアと世界」ですが、主に国際報道に携わった経験、それを通じて知った国内外のメディアの実情、メディアで国際問題と関わる仕事をしていたからこそ出来たさまざまな活動などについて説明して行きましょう。

グローバル人材であるには、最低限、グローバルなスタンダードでコミュニケーションを取る必要があります。と言いながら、振り返ってみると、高校時代は英語が好きではなく、真面目に勉強した記憶はありません。英語はあくまでも「受験のため」でした。それが、やがて英語で取材し、国際会議で議長を務めたり、さらに大学でグローバル人材の養成に関わったりするのですから、不思議なものです。英語や国際的な場での活動には本当に苦労し、失敗の連続でもありました。

その経験から言えるのは、日本にはグローバル人材が絶対に必要であり、**若い人にはもっと早い段階からこの事実気づき**、準備を進めていってもらいたいということです。筆者の場合、いかにも気づくのが遅かったと反省しています。だからこそ、反面教師の意味も込めて、筆者の苦労話を聞いていただき、そして読者の皆さんが本当のグローバル人材になるうえでの参考にさせていただきたいのです。

##### ジャーナリストへの道

筆者が高校時代を過ごしたのは、世界的に学生運動や労働運動が盛り上がった1960年代後半でした。その影響もあったのでしょう、理系を志した高校生はマルクス主義に関心をもち始め、文系に転じることになりました。大学入学後も、マルクス経済学に関する勉強に力を入れてきたつもりです。このとき以来、いまでもマルクスのいう「下部構造」、すなわち経済が社会の動きの基本にあるという意識をもち続けています。

マルクス経済学者を志した時期もあったのですが、まずは現実の経済のメカニズムを肌で知るべきだと思い、マスコミ各社の試験を受け、運よく日本経済新聞に入ることが出来ました。もっとも、このときにジャーナリストとしての明確な哲学や理念があったわけではありません。文章を書くのが得意という意識をもったこともありませんでした。

文章の執筆について言えば、新聞記者の世界は**99.9%までが努力**でどうにでもなると確信しています。特別な才能は必要なく、訓練を積めば記事を書けるようになるのです。なぜ、100%ではないかかというと、ほんのわずかのところは、努力では埋められない才能の世界があると思うからです。新聞社の仕事を通じて、努力によって壁は乗り越えられると確信するようになりました。これはどんな仕事にも当てはまることでしょう。もちろん、努力を続けられること自体が才能であるということも出来ますが…。

さて、運よく滑り込んだ新聞の世界ですが、長く勤めるつもりはありませんでした。3年ほど務め、ある程度、社会での経験を積んだら、大学院を経て学者の道を歩もうと考えていました。それが、どうでしょう。新聞社の居心地がよほど良かったのか、3年のつもりがなんと35年も勤めることになりました。何より、魅力的だったのは、名刺一枚で誰にでも会えることです。こんな恵まれた職業はほかにはないでしょう。「**お金をもらいながら勉強させてもらっている**」という気分でした。

##### 日経との運と縁

日本経済新聞社には「運と縁」を感じるがあります。たとえば、入社前の1973年12月のある日のこと。東京・大手町の日経本社に記者職の内定者が集められ、時の編集局のナンバー2、小島章伸総務から訓辞を受けました。たまたま、この日の夜の便でパリに行く予定だった筆者は大きなリュックを担いで日経本社に行き、訓示の後羽田に向かったのです。いまでいう「卒業旅行」のようなもので、ニューヨークを経由してメキシ



ビル・クリントン大統領へのインタビュー（右が筆者；1993年7月4日撮影、ホワイトハウス提供）

コに入り3ヶ月過ごすつもりでした。

一昼夜たち、オルリー空港に着き、機外に出たところで、どこかで見た日本人男性がいるではありませんか。よくみると、前の日に訓示をしてくれた小島氏でした。何という偶然でしょうか。聞けば「経済協力開発機構（OECD）のジャーナリスト会議に出席する」とのこと、長身の颯爽（さっそう）とした彼の姿はいまでも忘れることが出来ません。

小島氏は日経グループの要職をこなされましたが、日本経済新聞時代に、外報部長（現国際部長）を5年務められ、国際ジャーナリストとして活躍されました。筆者がその後、小島氏と同じように国際部長を5年務めたのはある意味で運命のような気がしてなりません。

日経では、もう一人、国際部長を5年務めた人がいました。吉田寿孝氏で、日経を創設した明治の財界人益田孝氏のひ孫に当たる方です。同氏にも強い縁を感じることもありましたが、筆者が国際部員だったころ、部長としていろいろ面倒を見ていただいたのですが、いま振り返ると、同氏の後を追いかけてきたような気がします。記者としての振り出しが経済記者で、その後、国際報道記者に転じ、ワシントン支局長から国際部長、日経ヨーロッパ社長、その後、大学教員という道まで、まったく同じでした。

駆け出し時代も幸運に恵まれていたと思います。配属先の経済部の部長はやがて社長になる鶴田卓彦氏で、部次長の一人が同氏の後に社長になる杉田亮毅氏だったのです。将来のトップに若いうちから覚えてもらったことはその後の記者生活でもプラスであったと確信しています。

将来の幹部や経営層に早い段階から面識を得るのは確かに有利なことかもしれませんが、ただ、そのような幸運はほかの人にもあるはず。そうした出会いがよい方向に働いたとすれば、本人が努力し実績を上げたからでしょう。僥越な言い方かもしれませんが、筆者が努力していなければ、引っ張りあげられることもなかったと思います。**運と縁は、努力しなければ掴み取ることはできない**と言えるのではないのでしょうか。もうひとつ大事なことは、自分は縁を引き寄せられるし、運がよい人間なのだと思うと、自信が出てきて普段以上の力を発揮することができるのではないかということです。筆者自身、そう考えてきたような気がします。

こんな言葉があります。「小才は、縁があって縁に気づかず、中才は縁に気づいて縁を生かせず、大才はそで振り合う縁も生かす」。柳生家の家訓と言われていますが、言いえて妙ですね。要は、縁をしっかりと意識しその意味を考えることではないのでしょうか。そうしてこそ、運が回ってきて、物事がよい方向に回って行く——。いまそんな風に考えています。

## 忘れえぬ人々との出会い

新聞社に入社すると普通はまず、地方支局勤務となりそこで経験を積んでから本社の社会部や経済部などに配属になりますが、筆者の場合はそうではなく、いきなり経済部勤務となり、大蔵省（現財務省）担当となりました。1974年のことで、首相は田中角栄氏、大蔵大臣（現財務大臣）は、のちに首相になる大平正義氏でした。大学を卒業してすぐに大蔵省詰めとなるのは珍しく、他社の記者からは「キャンパス上がり」などと冷やかされました。記者としての振り出しが官僚世界の中心であったことはラッキーだったのかもしれません。何より、権力の中核を取材できたこと、そして自社や他社のベテラン記者を観察できたことはかけがえのない経験でした。

記者として刺激を受けた人物を聞かれたとき、いつも3人をあげることになっています。そのうちの2人には入社後10年以内に会いました。一人は中川一郎農林大臣（当時、故人）、もう一人は稲盛和夫京セラ社長（当時、現同社名誉会長）です。このお2人にもご縁を感じざるを得ません。中川氏にお目にかかったのは、農林省（現農林水産省）詰めになったときですが、偶然にも、当方の住むマンションはご自宅のすぐ近くにありました。当時、将来の首相候補と目されていたので、政治記者を中心に多くの記者が毎晩、自宅に集まります。いわゆる「夜討ち」「夜回り」とよぶ取材活動です。こちらは経済記者ですが、担当の省のトップの家の前を通ると、新聞社の旗の付いたハイヤーが何台も止まっているので、立ち寄らないわけには行きません。結果として、ほぼ毎晩、通いつめることになりました。朝、出勤の際、ハイヤーに乗せてもらい、話を聞いたこともあります。いまでも覚えているのは、ある晩、車座になり、大臣の話を聞いたときのことです。

中川氏はこう言い放ちました。「君たちは私のことを右翼とかタカ派というが、それならどう国を守るのか、一人ひとり言ってみたまえ」。以来、農林省詰めも記者ながら、安全保障の本をいろいろ読むことになりました。いま振り返ると、中川氏は若い記者を鍛えてやろうという意識だったのでしょ。そんな「夜間スクール」で勉強したことがその後、いろいろ役に立ちました。

稲盛氏にお目にかかったのは、日経グループが出している日経ビジネス誌の編集部に出向しているときでした。すでに、ベンチャー企業を興し、



オバマ大統領の記者会見



グローバル企業の道を突き進む経営者として注目される存在です。毎回、毎回のインタビューが真剣勝負であるというような気迫を感じました。いまでも取材のメモは京大大型カードの形で残っていますが、いま読み返しても、インタビューの中身の濃さに驚かされます。同氏は、心や精神の問題にも関心をもって、「強く思えば思うほど物事は成就する」というような話をよくされていました。

社会的に影響のある人物の面識を得るだけではなく、彼らをじっくり観察できるので、記者冥利に尽きるというべきでしょう。ただ、記者の宿命というべきか、習性というべきか、ひとつの仕事が終わると、すぐに別の仕事に取り掛かることが多く、前の仕事のことを忘れようとする結果、それぞれの取材が一過性で終わってしまう可能性があります。当時、大学の先生方に指摘されたことが、記者はよい情報をもっていても体系化できていないという問題です。**フローをストック**にできていないと言い換えることも出来るでしょう。どのような仕事もそうですが、やはり記録を残し、それをしっかり分析し、後でも役に立つ形に整理しておくことが大事です。反省を込めて、若い人への参考に供したいと思います。

## 国際報道の事始め～シンガポールの思い出

### 国際情勢への関心

駆け出しのころ、自分が国際報道に携わることになるなど夢にも思いませんでした。あくまでも経済・産業担当の記者として経験を積んで行くのだろうと漠然と考えていたのです。ただ、日本自体が高度成長を経て世界第二の経済大国になれば、当然ながら世界各国との関係が重要になります。国内の取材をしていても世界とのかかわりが重要なテーマになってくるのも当然と言えるでしょう。日本銀行詰めの際は、為替相場を担当したことがあります。当時のマイケル・ブルメンソール米財務長官（日本で言えば財務大臣）が発言をすると円・ドル相場が大きく動き、その都度、取材に走り回されたものです。そのブルメンソール氏と20年後に米国の外交問題評議会のスタディー・グループで一緒することになるとは、もちろん、想像もできないことでした。農林省担当の時には、日米農産物交渉がありました。日本は牛肉やオレンジの市場を開放せよという米国の要求を受けての交渉で、農政担当とはいえ、国際情勢を知らない仕事にならないと痛感したものです。

経済面でも政治面でも戦後の国際的な枠組みが大きく変わったことも、国際情勢に関心をもつことになった背景と言えるでしょう。経済面ではいわゆる**ブレトンウッズ体制**が崩れ、為替相場は固定時代から変動時代へと移り、円高が急速に進みました。政治面では冷戦構造が変質し始めたのも同じようなことです。象徴的なのは、1985年の出来事です。経済面ではいわゆる**プラザ合意**で主要国の為替レートに再調整が行われ、政治面においてはソ連で改革派のミハイル・ゴルバチョフ氏が共産党の書記長となって、その後の政治民主化を推進しました。

記者としても国際情勢そのものを追いかけて、分析し、論じてみたいと思うようになったのはこのころです。新聞社に入社して10年ほどが経っていました。

### アジア駐在の幸運

シンガポールに着任したのは1985年のことでした。前年に赴任が内定したのですが、これには偶然的要素もありました。経済記者でしたので、仮に海外に出るとしてもニューヨークかロンドンであろうと考えていましたが、当時の社長が若い記者を海外に出せと指示を出したというのです。私もその一人となり、シンガポール駐在が決まったのですが、それからが大変です。任地は英語圏ですから、まずは英語が使えるようにならなければなりません。ところがまったく自信がないのです。同じような先輩2人と相談した結果、サイマル・インターナショナルの日本人講師から週一回、特訓を受けることになりました。内容は時事英語の丸暗記、英語放送の聞き取り、雑誌TIMEの音読です。ところが、どれも上手く行きません。汗だくの特訓でした。



シンガポールの中心街

2人の先輩はそれぞれロンドンとワシントンに赴任の予定でした。筆者がラッキーだったのは、講師の方が当時、シンガポールのストレーツタイムズ紙の東京支局にも勤務していたことです。この国の事情や記者活動などについても聞いたことがその後大いに役立つことになりました。

とはいえ、ただか半年程度、しかも週1回の訓練では、そうそう英語が使えるようになるものでもありません。赴任後はいろいろ苦勞をすることになります。まずは支局スタッフの英語が聞き取れない。英語の世界に何とか慣れたと感じるまでには1年かかりました。不思議なもので、毎日、毎日意識して使っていると、1年も

すると「自分は英語を話している」という感覚をもてるようになりました。そうなれば、しめたものです。

苦手意識があったものですから、自分に課したことがありました。それは、記者会見では必ず、ひとつ質問をすることです。各国から記者が参加する中で、質問するのは結構、勇気が要ります。このときに経験をもとに、いまでも会議などで実践しているのが、最初の質問をすることです。これなら、脈絡を意識する必要もありません。最初ですから何でも自由に聞けるというわけです。あるとき、一日一膳ならぬ、一会見一質問を敢行してみました。ところが何度、質問しても相手は分かってくれないのです。しまいには、隣にいた記者にスーツの袖を引っ張られ、着席する羽目になってしまいました。恥ずかしいやら悔しいやら……。どうして理解してもらえなかったのでしょうか。あとで、同行した現地スタッフに聞くと、大事な単語を飛ばしていたとのこと。それでは理解されないのも当然です。

ついでに、もうひとつ失敗談を紹介しましょう。シンガポールから帰国し、間もないころのことです。オーストラリアの首都キャンベラで、アジア太平洋地域におけるソ連（ロシアの前身）の役割に関するシンポジウムがあり、それに参加するようとの指示が上司からありました。筆者は単に話を聞きに行くだけと思ったものですから、安請け合いましたのですが、到着してみると、楕円形のテーブルには20人分ほどの席があり、それぞれ机には名札が置かれています。よくみると筆者の名札もあるではないですか。シンポジウムというより、会議に近いものだったのです。日本からの参加者はほかに3名いて、英語が上手な方ばかりでした。シンポジウムは3日間続きましたが、聞いていても中身がよく分かりません。黙って聞いているだけで2日が過ぎました。その夜、宿舎に戻って自問しました。「会社から高いお金を出してもらい出張して、一言も発せずに帰るのか」と。否、そういうわけには行きません。その夜、小さなカードに発言すべき内容を英語で書き、それを会議で読み上げようと決心しました。

3日目の会合で、「最初の質問」のルールに従って、議長に発言を求めました。そこまではよかったのですが、いざ発言を始めると、メモの字が薄くてよく読めません。おそろく暗がりですら書いたせいでしょ。なお悪いことに、カードの順番が分からなくなってしまいました。顔面が赤くほてってくるのだけはよく分かりました。結局、1、2枚のメモを読み上げただけで、着席することになってしまいました。自己嫌悪に陥ったことはいうまでもありません。

### 失敗や苦勞をいまに活かす

いまにして思うと、シンガポールの記者会見もキャンベラの国際セミナーもよい経験でした。以来、教訓を生かし、準備に相当の時間をかけるようにもなりました。会議では最初の発言ないし質問をする、そのためには必要以上の準備をし、いろいろなシナリオに備えて練習しておく——これらが大事なのです。伊藤忠商事の元会長瀬島隆三氏の言葉とされていますが、成功するための要諦は「用意周到、準備万端、先手必勝」です。これは何事にも通じるでしょう。

ただ、これらの失敗は20代、できれば10代で経験しておきたかったとつくづく思います。若い方には、早いうちにどんどん挑戦して、どんどん失敗してもらいたいものです。

（『グローバルキャリアのすすめ～プロフェッショナル～』から一部抜粋・編集）



世界経済フォーラムが年次総会を開くスイス・ダボス（フォーラムのサイトから）

## 引用文献

小西尚実編『グローバルキャリアのすすめ～プロフェッショナル講義～』関西学院大学出版会、2018。

2018年3月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部



シンガポールの指導者：故リー・クワン・ユー元首相